

卷頭言

下向井 龍彦

第七号の刊行から三年近くが過ぎてしまった。ここまで遅れた責任はすべて私にある。第七号は坂本賞三先生卒寿記念特集号であった。同時に私の退職記念号でもあったから、退職後は野となれ山となれ、などと思つていたわけでは決してないが、たしかに私の緩みがあつたことは間違いない。早くに寄稿してくれていた諸君には深くお詫びしたい。五年前まで、広島大学に古代史専攻の教員は、学部名で呼ぶなら、文学部・総合科学部・教育学部社会科学教育に分かれて三人いた。それがいまや総合科学部に一人、渡邊誠氏だけになつてしまった。寂しい限りである。間違つた文教政策・学術政策・大学政策の大きなうねりに飲み込まれて、あれよあれよという間に、このような事態に立ち至つたのであるが、学内政治とはまったく縁のない私は、その流れをただただ傍観するだけだった。しかし学問に沈潜していたわけではなかつた。学生を育てることは怠らなかつたと思うが、研究に身を入れず、読書と野良仕事に逃避していた。それは今も変わっていない。

かつて教育学部社会科学教育に歴史学の教員は、日・東・西で五人いた。みな学生からそれなりに慕われ、専門分野の研究でも名前は知られていた。最後に残つた私が定年退職した三年前、「そして誰もいなくなつた」。私は、二一世紀の初めの年に刊行した『武士の成長と院政』（講談社日本歴史07巻 二〇〇一年）の学術文庫版「あとがき」（二〇〇九年）に つよい危機感を込めて、

私たち教育学部に所属する日本史教員は「日本史学」を研究し、中学校の社会科学教員・日本史教員を目指す学生に「日本史内容学」を教えている。

私のような立場の日本史研究者は全国の教育系大学・学部にも多数在職しており、日本史学の学問水準を支える大きな力になっている。

日本史学の研究成果の最大の享受者は、次代を担う中学生・高校生であると思う。そして彼らに授業を提供する社会科（日本史教師）、社会科（日本史

教師を目指す教育学部の学生である。私たち教育学部の日本史教師は国民の「歴史認識」形成に関与する最前線で日本史学を研究しているのであり、このことをしっかりと自覚しなければならぬと思う。私たち教育学部の日本史教師が日本史学の研究から撤退したならば、日本史学の学問水準と活力が大きく後退するばかりではなく、日本史学と日本史教育の乖離も確実に進んでいくことになる。それは日本史学の危機であるとともに日本史教育の危機でもあるだろう。学問としての日本史学と乖離していた戦前の国史教育が何をもたらしたか、私たちは忘れてはいけない。

と書いた。私の懸念は、予想したとおり現実のものになつた。

退職後、研究そつちのので、学生時代以来の「積読本」を、文学・哲学・社会科学、なんの脈絡もなく手当たり次第に読み漁っているが（その成果？は本号掲載「腰縄とは何か」にも多少反映されている）、この秋に読んだロバート・オーウェン『新社会観』（岩波文庫 一九五四年）に、次のような一節があつた。

教授方法が重要（であるが）、しかし教育の方法と教育そのものは別物であり、この二つのものほど別物であるものはない。最悪の方法でもそれを適用して最善の教育を施すことができ、最善の方法でも最悪の教育を施すことができる。両者の真の重要さを数によつてはかるとすれば、教育方法は一に、教育内容は数百万に比することができよう。何故なら、前者は単なる手段にすぎないが、後者はその手段によつて達せらるべき目的だからである。

オーウェンのこの教育観の当否はさておくと、それが多少とも理解されていたら、五人いた歴史学の教員がゼロになることはなかつたかもしれない。

さて、広島古代史学は渡邊氏一人の双肩にかかることになつたが、情熱・研究能力・指導力ともに素晴らしい人である。広島古代史学のよき伝統を受け継いで、後進を育成してくれることを心から願つている（育成中であることを知っている）。広島古代史学の拠り所となつている『史人』は、次号から渡邊氏に引き継いでらおうと思う。『史人』に集う坂本賞三先生門下、渡邊氏とともに研究してきた下向井門下一同は、渡邊氏の育成活動を側面からサポートしていきたい。その第一の実践は、『史人』に寄稿することであり、本号の顔ぶれはその前駆である。